

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13548

研究課題名（和文）西アフリカ経済の発展経路に関する歴史的研究－繊維産業を事例にして

研究課題名（英文）Historical research on the West African path of economic development: The case of textile industry

研究代表者

小林 和夫（Kobayashi, Kazuo）

早稲田大学・政治経済学術院・准教授

研究者番号：00823189

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、西アフリカの繊維産業に着目しながら、植民地化以前の時代から植民地時代を経て独立期までの地域経済の発展経路の解明に取り組んできた。植民地化以前の状況については、日本語の単著『奴隷貿易をこえて 西アフリカ・インド綿布・世界経済』のなかで論じた。その一方で、植民地化以前の時代にみられた繊維生産の季節性や性別分業体制、織布の技術などが、その後の時代にも連続していた事例があった点については、Oxford Research Encyclopedia of African Historyに掲載された論文などで述べている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

季節性、土壌の質、繊維産業の性別役割分業や技術など、植民地化以前における地域経済や繊維産業の特徴の一部が、現在においてもみられる点が確認された。また、南アジアや東南アジアなど他の熱帯地域との比較研究を進める上での参照軸を提供したことが考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this project, I have explored the developmental path of West Africa from the precolonial to postcolonial periods, focusing on the textile industry. In my monograph, a Japanese book, I discussed it during the precolonial period in details. In the meanwhile, in an article published from the Oxford Research Encyclopedia of African History, I highlighted continuities in textile production such as seasonality, gender-based division of labour, and weaving technology, from the precolonial period to later periods.

研究分野：経済史

キーワード：西アフリカ 発展経路 繊維産業 熱帯 季節性 大西洋奴隷貿易 労働力

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

21世紀に入ってからアフリカ経済は急速な成長を遂げている。その背景として、世界各地の資源需要の高まりに伴うアフリカの輸出拡大とアフリカへの投資拡大、その恩恵を受けた中流階級を中心とする消費の爆発が指摘されている。その一方で、製造部門と農業生産性の低迷が喫緊の課題となっている。こうした問題を目の当たりにして、開発経済学は現状分析を進めてきた。しかし、アフリカ経済がどのような発展パターンを遂げてきたのか、数世紀に及ぶ長期的な歴史的考察は、世界的に見てもまだ萌芽的段階にある。

このような背景のもとに、報告者は、主に西アフリカに焦点を絞り、18世紀から20世紀にかけて、どのような経済発展を遂げてきたのかを究明することを研究課題に設定した。具体的にはアフリカの製造部門の代表的産業である繊維産業に注目し、その歴史的発展について農業や交易との関連のなかで捉えることを目指す。それと同時に、19世紀末から20世紀半ばにかけてアフリカ各地でみられた植民地支配がどのような影響を及ぼしたのかどうかを考察する。近年の経済史研究では、熱帯の発展が注目を集めているが、本研究はそのような文脈にも寄与することができると思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、18世紀から20世紀に至るまで西アフリカの繊維産業がどのような発展を遂げてきたのかを、歴史資料に基づいて明らかにすることである。それを通じて、サハラ以南アフリカの経済発展パターンの解明に貢献することを目指す。また、農民や消費者のエージェンシー（行為主体性）に注目することで、アフリカをヨーロッパ資本主義の「受動的犠牲者」と位置付ける従属論あるいは世界システム論的解釈とは異なる、よりバランスのとれた発展像を描き出すことも試みる。

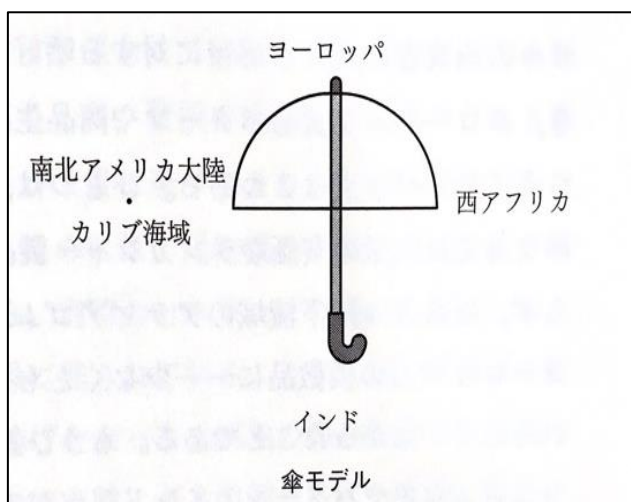
3. 研究の方法

本研究は、2020年度から4年間にわたって、西アフリカ経済のなかでも繊維産業に注目して、植民地統計や各国文書館の所蔵資料に基づいて、18世紀から20世紀後半に至る発展パターンを解明することを目指している。

4. 研究成果

本研究の開始時期直前からコロナ禍が始まり、渡航制限が課されたため、2020年度（研究初年度）以降の海外渡航計画を大きく見直すことになった。現地調査を行う代わりに、文献資料を可能な限り収集して研究課題に取り組むようの方針転換した。当初予定していた研究対象時期後半に相当する20世紀（植民地期後半から独立期まで）については、今後も継続的に研究する必要があるものの、植民地化以前から植民地期前半までは、概ね順調に研究を進めることができた。主な成果としては、日本語の学術書（単著）を1点刊行したほか、英語・ポルトガル語・中国語などの外国語の論文として発表してきた。

まず、植民地以前の状況については、日本語の学術書（単著）『奴隷貿易をこえて—西アフリカ・インド綿布・世界経済』（名古屋大学出版会、2021年）のなかで、西アフリカ経済史の古典である A. G. Hopkins, *An Economic History of West Africa* と近年の Gareth Austin の研究などを参照しながら、西アフリカの環境条件・要素賦存条件やイスラームの浸透から繊維産業が定着・展開した過程を概観した。西アフリカにおける繊維生産と交易は、消費者の布に対する嗜好の形成にも寄与した。彼らの嗜好は、15世紀以降はヨーロッパ人との交易に影響をおよぼすようになり、それは大西洋奴隷貿易や大西洋経済圏の展開にも少なからず影響した。過去の研究でも明らかにしたように、18世紀の西アフリカでは、多くのインド綿布が消費者の注目を集めたが、本研究では、通説の「三角貿易」論（ヨーロッパ、西アフリカ、南北アメリカ大陸の三地域間からなる



貿易論)の代わりに、インドの重要性を組み込んだ「傘モデル」を代替モデルとして提示した(右図。参照:拙著『奴隷貿易をこえて』p.255)。西アフリカの繊維産業の展開や消費者の選択に着目することで、ヨーロッパを介したインドとの経済的関係が明らかになると同時に、大西洋奴隷貿易や大西洋経済圏をグローバルな文脈に位置付けることができることを拙著『奴隷貿易をこえて』では強調した。なお、「傘モデル」については、2021年以降、植民地史研究の国際学会(ブラジル・オンライン、2021年9月)や第19回世界経済史学会(フランス、2022年7月)をはじめ、いくつかの研究会で発表してきた。

また、拙著『奴隷貿易をこえて』では、日本国内で(おもに日本語で)刊行された研究蓄積が、海外の研究蓄積のなかにもどのように位置付けられるかといった点にも言及した。日本における大西洋奴隷貿易研究やアフリカ経済史研究は、もとより研究者の人数がきわめて少なく、また、海外(とくに英語圏)の研究成果を適切にカバーしていなかったり、従属理論や世界システム論のパラダイムから脱却できていなかったりするなど、国際水準から遅れをとっているだけでなく、ディスシプリンとしても成熟していない。同書では、日本の研究蓄積と海外の研究蓄積のギャップを示しながら、今後の研究の方向性を示した。この点については、現在準備中の一般書のなかでもあらためて具体的に説明する予定である。

先に述べたように、拙著『奴隷貿易をこえて』は、西アフリカの繊維産業を地域経済の発展やグローバルな動きと結びつけながら論じたものであるが、*Oxford Research Encyclopedia of African History* (Oxford University Press, 2024)に掲載された拙稿‘Political Economy of Textiles in the Atlantic Slave Trade’(ORE論文)では、西アフリカに加えて、西中央アフリカの事例も視野に入れて議論した。タイトルにあるように、大西洋奴隷貿易の時代(16-19世紀)が中心になっているが、植民地以前にみられた季節性(環境条件)、性別分業体制、織布の技術といったものが、植民地時代や独立後にも連続してみられたことも述べている。これは、西アフリカ経済の発展経路の文脈のなかで、大西洋奴隷貿易や繊維産業の発展を論じたと述べることもできよう。具体的には、環境・地理的条件および要素賦存条件に由来する低い土地生産性と乾季(農閑期)の労働力余剰が地域特有の細幅の織機を選択した点や、地域内で生産された繊維製品の消費を通じた消費者の嗜好の形成が対外経済関係に及ぼしうる影響といった点などがあげられる。この点については、脇村孝平編『近現代熱帯アジアの経済発展—人口・環境・資源』(ミネルヴァ書房、2024年)に収められた拙稿「植民地時代までの西アフリカ経済—比較研究のための覚書」のなかでも言及した。また、ORE論文では、拙著『奴隷貿易をこえて』よりも詳細に消費者の実態を描くことを努めた。たとえば、奢侈品規制を取り上げることで、社会階層によって消費された繊維製品が異なっていた点に言及した。

さらにORE論文では、植民地化以前の時代に布が貨幣として使用されていたことを述べただけでなく、National Centre for Arts and Culture (The Gambia)のオーラルヒストリー史料を踏まえて、ガンビア独立後の内陸地域(1970年代)において、ダラシではなく、布が依然として貨幣として使用される状況が見られた点にも言及した。これ自体は興味深い事例ではあるものの、植民地時代から独立期にかけて布を貨幣として使用した経緯については、まだ実証的な考察を深めていく必要がある。この点については、2022年7月にパリ(EHESS)で開催された第19回世界経済史会議のセッションでも口頭発表を通じて、議論を深める可能性を探った。

大西洋奴隷貿易の時代から、19世紀前半の換金作物貿易の時代、そして同世紀後半に始まる植民地期にかけて、西アフリカに大量の繊維製品が輸入されたことはよく知られている。西アフリカ内部の繊維産業に対する輸入製品の影響は、すでにディベートのトピックになっており、その主要な論点と議論については拙著『奴隷貿易をこえて』などでも整理した。現時点までの研究成果を簡単に整理すると、かつての従属理論(たとえば、Walter Rodney, *How Europe Underdeveloped Africa* (邦訳『世界資本主義とアフリカ』))のように、外来の繊維製品の大量輸入によって西アフリカの繊維産業が衰退した、と捉える見方は、実証的根拠に欠ける説として支持されなくなっている。むしろ、現地の織工の柔軟な対応による(輸入糸を用いた紡織など)レジリエンスが注目を集めるようになってきていることが確認できる。現地の人びとの主体性に着目して西アフリカ経済の歴史的展開を検討する上でも、重要な視座を提供しているといえよう。なお、このような視点は、インド経済史研究(とりわけTirthankar Royによる一連の研究。たとえば、*The Crafts and Capitalism: Handloom Weaving Industry in Colonial India* (Abingdon: Routledge, 2020))の成果から刺激を得ていることも付記しておく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kobayashi Kazuo	4. 巻 63
2. 論文標題 Tecendo redes imperiais: uma dimensao asiatica do comercio britanico de escravos no Atlantico no saculo XVIII	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Afro-Asia	6. 最初と最後の頁 11-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9771/aa.v0i63.38307	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 小林 和夫
2. 発表標題 植民地以前の西アフリカにおける布貨幣
3. 学会等名 日本金融学会2022年度春季大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuo Kobayashi
2. 発表標題 The British Atlantic Slave Trade and Indian Cotton Textiles: An Umbrella Model
3. 学会等名 XIXth World Economic History Congress（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuo Kobayashi
2. 発表標題 The World of Weavers in The Gambia in the 1970s
3. 学会等名 XIXth World Economic History Congress（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuo Kobayashi
2. 発表標題 An Umbrella System: South Asia in the Early Modern Atlantic
3. 学会等名 South Asia through a Global Lens (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazuo Kobayashi
2. 発表標題 The British Atlantic Slave Trade and Indian Cotton Textiles: An Umbrella Model
3. 学会等名 VIII EHC Imperios Coloniais da Era Moderna: rupturas e permanencias (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林 和夫
2. 発表標題 西アフリカ経済の発展径路にかんする試論－19世紀のパームオイル輸出生産を事例として
3. 学会等名 経済史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林 和夫
2. 発表標題 大西洋奴隷貿易とその後－西アフリカ、インド綿布、世界経済
3. 学会等名 「奴隷」と隷属の世界史 - 地中海型奴隷制度論を中心として - 研究会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Giorgio Riello and Kazuo Kobayashi	4. 発行年 2022年
2. 出版社 UNESCO and China National Silk Museum	5. 総ページ数 413
3. 書名 Zhao Feng and Marie-Louise Nosch, eds., Textiles and Clothing: Thematic Collection of the Cultural Interactions along the Silk Roads	

1. 著者名 小林和夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 277
3. 書名 小川幸司・島田竜登編『岩波講座世界歴史11 構造化される世界』	

1. 著者名 Kazuo Kobayashi	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 142
3. 書名 Redhika Seshan and Ryuto Shimada, eds., Connecting the Indian Ocean World: Across Sea and Land	

1. 著者名 小林 和夫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 326
3. 書名 奴隷貿易をこえて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------